

令和5年度第1回羽島市総合教育会議（会議要旨）

日 時	令和5年12月26日(火) 午後1時30分～午後3時15分
場 所	羽島市役所第1委員会室
出 席 者	<p>森嘉長教育長、黒田淳教育委員、今枝甫教育委員 春日民奈教育委員、今井田裕子教育委員 松井聡市長 （事務局職員） 伊藤市民協働部長、岩田生涯学習課長、大橋同課主幹 吉田同課係長 （学校関係者） 黒木羽島市立中央中学校教頭 （関係課職員） 今井田教育委員会事務局長、小川教育委員会事務局次長兼教育政策課長、高橋学校教育課長、木村福祉課長 長江教育支援センター所長補佐、熊崎学校教育課係長</p>
内 容	<p>1 開会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 会議公開及び傍聴の有無の報告 ・ 資料確認 <p>2 あいさつ （市長）</p> <p>3 協議（3つのブロックに分けて説明、意見交換をそれぞれ実施）</p> <p>1 ブロック（P1～18）</p> <p>【説明】 教育委員会事務局が、「不登校の現状並びに現状を踏まえた市の取り組み」について説明</p> <p>【意見交換】 （教育委員会 委員） 6 ページで羽島市の児童生徒の不登校要因、7 ページで不登校児童生徒が最初に行きづらいつと感じたきっかけの全国結果が記載されている。羽島市では先生のことの不登校の要因として出なかったのか。</p> <p>（教育委員会事務局） 6 ページは先生が回答した結果、7 ページは児童生徒が回答した結果をまとめたもので、ずれが少し生じている。 市では7 ページのような児童生徒への聞き取りはしていない。</p>

(市長)

6 ページで、教師が感じる不登校の要因は児童生徒の不安や無気力が突出しているが、不安や無気力というのは個別具体には 7 ページによく似た傾向にあるのではないか。全く別のものという認識は個人的にできなかった。

(教育委員会 教育長)

6 ページはおそらく国の項目にしたがって調査しており、不安や無気力の中身までは実際に聞いていない。そのため、不安や無気力の中身は本人に聞いてみないと分からない。

7 ページは全国の不登校の児童生徒全員に聞いた結果ではなく、令和 3 年 10 月に抽出で聞いた結果をまとめたものである。羽島市も聞ければ良いとは思いますが、市長が言われたとおり、不安や無気力の中身は 7 ページに繋がっていくと感じる。

(教育委員会 委員)

11 ページの時間割の写真には、月曜日から金曜日まで、1 時間目から 5 時間目まで色々な教科の項目が入っており、担当の先生の名前も書いてある。一般の学校にある相談室でこうした授業が毎回行われているとしたらすごいと思うが、これは先生が空き時間に相談室へ行き、学年関係なく教えてくださっているのか。

(教育委員会事務局)

学校で多少違いはあるが、特に中学校などは空き時間を先生が上手に使っていただき、子どもたちと触れ合う時間とともに自身の専門教科を教えられるような時間割を組んでいる。

(教育委員会 委員)

文部科学省と同様に、学校復帰をまず子どもたちには求めないのが一番である、ということが教育委員会の方針として出されているが、個人的には何とかして普通の学級に戻ってほしいというのが一番の願いではないかと思う。

実際に今年から小熊小で適応指導教室が始まったが、こういう多様な学びを使って普通の教室に戻れた事例はどれぐらいあるか。

(市長)

13 ページの校内適応指導教室「のぞみ」の開設等も含め、通常の

学習体制に戻られたというような実績データはあるか。

(教育委員会事務局)

これまでなかなか学校に行けなかった子も、「のぞみ」に通うことができるようになってきている。そこからさらに学校復帰という事例については、中学 3 年生の生徒が進路相談に向けた学校との懇談を密に行い、11 月、12 月ごろから来年の高校受験に向けて徐々に学校に行く日を増やし、現在では私立の高校受験のためにほぼ毎日学校に通っているという実績が今年度早くも 1 件出ている。

(教育委員会 委員)

将来、社会に出るにあたって人と関わって生きるということはどうしても必要になってくると思う。義務教育のうちから、将来に向けた話し合いを保護者との間で行っていくことがすごく大切ではないかと思う。そういうことをプログラムのような形で行っていくことは難しいか。

(教育委員会事務局)

カリキュラムという形ではないが、学校では学年に応じたキャリア教育、将来の夢を語り合う、それについて調べることで自分が今何をやらなければいけないか考えるような取組みは行っている。

(教育委員会 教育長)

学校に戻ってほしいという話については、児童生徒によって必要であれば、保護者と相談して学校から登校への働きかけを行うこともある。

先ほどの、学校に毎日通えるようになった中学 3 年生の事例については、進路について働きかけたことによって、生徒自身が目標をもってそうした行動に移せたと思う。ただ、往々にして、不登校の児童生徒は、本人も今の生活をしていたらどういふ今後のキャリアや人生になるか分かっているので、そこにさらに追い打ちをかけるような話をするのは、かえってマイナスになりかねないので、一人ひとりの児童生徒によって、どういったタイミングで話をしていくかは非常に大事ではないかと思う。

一方で、今言われたようなプログラムという形は、一人ひとりの進路に対する思いや状況が違うので、少し難しいとは思いますが、こういう子どもたちにふさわしい進路指導のプログラムもこれから考え

ていく必要があるのではないかと感じたところである。

(教育委員会 委員)

私の知っている子でも、なかなか学校に行けない子がいる。習い事には行きたいと言っても、同居の祖父母には、学校に行かないのに何で習い事は行けるの、と言われるそうで、余計に籠ってってしまうのではないかと思う。周りの大人や直接関係がない人であっても、不登校への理解をもっと広げていけると、肩身の狭い思いをする子がなくなっていくのではないかと思う。

私の知り合いの保護者は、子どもが中3の夏休み明けから学校に行けなくなってしまい、進路のことなどですごく悩んでみえたが、そういう保護者をフォローする体制はあるか。

(市長)

大切なことなので、家庭と学校、教育委員会とのリレーションの関係を説明いただきたい。

(教育委員会事務局)

スクールカウンセラーを通して、子どもとスクールカウンセラーだけではなく、保護者とスクールカウンセラーで悩みを共有しながらも、方向性を一緒になって考えるという体制で行っている。もちろん、学校の相談員、「こだま」や「のぞみ」の相談員を含め一緒になり、その子ども、その家庭にとって一番過ごしやすい状況は何かということ考えている。その一つに、メタバースでも繋がりを持つてるということで、学校には足を運べないが授業を見ることができるといように、学習不安を一つでも取り除くための動きを行っているところである。

(市長)

全体的な数字の中で、相談員やスクールカウンセラーが家族と親密な関係での相談対応をされるパーセンテージはどれくらいか。

(教育委員会事務局)

パーセンテージはないが、基本的に学校に通えなくなった時点で保護者との連絡は密になるため、すべての保護者と必ず連絡を取っている。

(市長)

100%の連絡を取ってから、個別の案件があったらまたセレクトして家族の方と話をされているとのことである。

(教育委員会 委員)

多様化に対応するということで、誰一人取り残さない教育、子どもが認めて子どもが認められる場所が必要だということがポイントである。不登校になってしまった子に対する対応としては、親も重々分かっているし、子どもも学校へ行かなきゃならないのは分かっているが登校できない。ここの理解はしっかり押さえておいて、それに対して色々な選択肢、「のぞみ」や「Room-HIKARI」、フリースクールなど、それから心に寄り添う機関として制度が整えられてきている。そういう状況の中で、なおかつ少子化で人数が減ってきているのに、不登校が30万人ぐらいいる現象は少し危機的な状況だと思う。不登校になってしまった子への対応としては、個人個人に応じた学習指導、進路指導、生徒指導であり、学校だけではなく、色々な場所での教育を認めていくことは良いと思う。ただし、誰一人取り残さない教育の実践について、子ども自身が生きていく術の基礎基本が培われるような形で行わないと、羽島市の非常に手厚い教育環境が中学校卒業で切れたときに困ってしまうのではないかと思う。

それから、社会に出たときに、不登校の延長で引きこもりになっていってしまわないようにすることは、教育を行っていく主体の側として十分配慮していかなければならない。

2 ブロック (P19)

[説明]

教育委員会事務局が、「学校現場における支援体制」について説明

[意見交換]

(市長)

初めて話をお聞きしたが、いわゆる未然防止という形での自己肯定感の醸成と、対人関係のスキルトレーニングという、重要なキーワードを伺ったところである。

この事柄も含めて、再度皆様方から意見を賜りたい。

(教育委員会 委員)

不登校は今に始まったわけではなく、ずっと続いていて、問題解

決への方策が打たれても依然として増加しており、約 30 万人と過去最多を更新している。増加の原因として、進路の学力的な部分が非常に大きなウェイトを占めることは分かるが、原因が一つに決め切れないところに解決策の難しいところがあると思う。

中央中学校を訪問した際、今の子たちは簡単に心が折れる、折れやすいという話を聞いた。心を折れにくくするにはどうしたらいいかという、夢や希望、目標をもつことだと思う。希望や目標があれば、モチベーションも上がり、学校生活や色々な苦しい場面に直面しても乗り越えていけると思う。特に中央中学校は一小一中であるため、小学校のときにどういう希望を持って卒業してきたかを小中の連携の中で掴んでいただき、そのサポートを通してさらに 3 年間、中学校で面倒を見ていただくことが不登校に対する一つの解決策ではないかと思う。

先日の新聞記事で、中学生の 5 人に 1 人は不登校や不登校傾向の状況と記載されていた。不登校傾向に一旦なると心の回復に時間がかかるため、先生方も小学校からの英語の教科化やプログラミング教育の必修化などで大変だと思うが、不登校傾向にできるだけならないように歯止めをかけていくことも一つの大きな流れだと思う。

8 ページについて、取組み I の方にウェイトが置かれて説明がなされてきているが、取組み II も並立して重要な実践をしないとイケないと思う。

(市長)

具体的に 8 ページの取組み II の関係、新たな不登校に陥りやすい子どもをつくらないということで、とりわけ小学校、中学校の連携した一人ひとりに対する指導、目標を見つけるような考え方について説明をお願いしたい。

(教育委員会 教育長)

まず 4 ページ、先ほどは羽島市も全国と同様の傾向であるという説明だったが、学年別の年度別グラフをよく見ると、中 3、小 6、小 5 は前年から減少している。一方、中 1 は前年の小 6 であり、令和 3 年度の小 6 は 14 人だったのが令和 4 年度の中 1 で 48 人と、34 人増えている。中 2 も、前年 15 人だったのが 41 人に増えている。中 3 は前年 27 人だったのが 29 人と、2 人しか増えてない。中 1 と中 2 がこんなに増加するのには何か原因があるのではないか。羽島市内の中 1、中 2 の特性かもしれないし、また、この子たちはコロナ禍の影

響で小学校の頃に、休み時間の遊びや子どもたち同士のグループ活動を禁止されるなど、対人関係における制限が非常にかかった学年であり、子どもたちの発達において大きな影響を与えたという見方が一つある。もう一つは、30、40年ぐらい前と比較すると、今の子どもたちは精神年齢でいくと2歳ぐらい発達していると言われている。精神年齢が2歳ぐらい発達しているとは、ませているということだが、実は社会性、いわゆる人との関わりにおいてはそういったハンデがあって幼く、認知の歪みが生じる。今、小学校では中学校よりも暴力行為が多く、子ども同士も、先生に対しても暴力行為が多い。平成27年ぐらいを境に、中学校よりも小学校の暴力行為が多くなった。そのため、今の先生方が経験していないような、特に小学校の子どもたちの特性をしっかりと理解しながら、子どもたちの精神発達と社会性のギャップを丁寧に見ていく必要があるのではないかと思う。

小学生の子どもたちに何をやりたいか尋ねると、全校で遊びたい、楽しいことをやりたいというのがほとんど返ってくる。もっと大人も先生も含めて、子どもたちと色々な遊びや活動ができると、活動の中で社会性も育まれるし、夢のきっかけになるようなこともできるのではないかと感じた。

(市長)

いわゆる対人関係ということで、自分が子どもの頃は地域のコミュニティ活動やお祭り、新たに始まった集団登校など、全員が連なって集団行動をやる中で子ども同士のコミュニティ社会が形成されていた。

小学校から中学校への各子どもへのリレーション、そのあたりの思いと課題があれば教えていただきたい。

(教育委員会事務局)

中学校では今、来年度のPTA役員を決めていく時期になっているが、校外生活委員を決める際に皆さんすごく苦勞される。子ども会も参加していない家庭が多かったりすると、同じ地域にどんな年頃の方が住んでいるのか把握できずなかなか難しい、と保護者からも言われている。そうしたところからも地域における、子ども会を中心としたような関わりが本当に薄れてきているのではと実感している。地域のコミュニティセンターが主催となったボランティア募集を学校にたくさん持ってきてくださり、子どもたちに紹介すると喜

んで参加する。そのイベントには小学校の子どもたちもボランティアではないが参加しているため、そうした機会に小学生と中学生の繋がりを広げていけると良いと思った。

先ほど話のあった学校の中での連携はもちろん、地域での小中の連携も大事にしていきたいと感じたところである。

(教育委員会 委員)

このところ、中学校の授業時間や学習内容が増えていることで、なかなか生徒との接触に時間が割けないとか、先生自身も窮屈感というのがあるのか、最近の傾向はどうか。

(教育委員会事務局)

職員は、ICT 機器が入ってきたので、子どもたちの興味を高め、思考を深められる活用の仕方といった研修もしていくことになるので、確かに忙しいという実感はある。

ただ、タブレットなどを使うことで、これは個によるが、生徒が学習に主体的に向かえる場面は増えているように感じる。

(教育委員会 委員)

学年が数年違うだけで、同級生の親の考え方なども全然違っている。最近では、自分の子がとてもかわいいという考え方に基づき行動している親の様子をよく見かけるため、叱られずに育ってきた子が多いのではないかと思う。人間関係でトラブルがあったときに怒られるとか、それで兄弟でかばい合うとか、そういうことができないままに育っているのでは、なおさら少し叱られただけで対応できずにもう学校に行きたくない、といった子が増えているのではないか、というのが個人的な考え方である。

その中で、そういう親と関わって、生徒にも何か厳しく叱ったらいけないのでは、ということで先生方も苦労されているのではないかと。

(市長)

全く同感だが、現場の方で何か悩みがあればお願いしたい。

(教育委員会事務局)

本当に価値観は多様化しているな、ということは感じている。今言われたとおり、怒られ慣れていないということもあるかなとは感

じている。冷静に話すと言われていることは分かるが、そんな言い方しなくてもいいじゃないみたいに、何かすり替えてしまう、そういった姿も見受けられるのは確かであり、叱るというよりは話して、考えさせて、次に向かう指導が増えてきている。

(教育委員会 委員)

不登校の子どもたちにはチームの支援が大切だという話と、教育相談支援という話があったと思うが、チーム支援となると人手も時間もたくさん必要になってくると思う。それを各個別に対応するととなると、先生方は普通の授業もしながらでは大変忙しいのではないかと感じた。羽島市では専門のスタッフが 9 名いて、色々な不登校の支援に当たっているという話もあったが、これからもっと不登校の児童生徒が増えてくると、マンパワーがもっと必要になってくるのではないかとの感想を持った。

(市長)

現在、予算編成中であり、参考にさせていただきたい。

(教育委員会 委員)

チーム支援は、担任が一人で抱え込んで、病気になってしまうことを避けるために大事な組織での対応である。それから不登校の子ばかりに目を向けるのではなく、新たな不登校を生まないために全ての子を支援するというのも大事な視点である。新たな不登校を生まないということでは、全ての子の関わりの中で、自己肯定感を高めるとか、対人関係スキルを学ばせるということが非常に重要であると聞いている。

今年、岐阜市内の中学校 5 校にフリースペースができたが、どの教室もほぼ定員いっぱい状況である。担任の先生から話を聞いた際、子どもたちは場所があるから行くのではなく、そこに人がいるから行くんだ、ということを強くおっしゃっていた。現在、「こだま」と「のぞみ」に大勢の子どもたちが通い始めている状況であるため、ぜひとも「のぞみ」のような場所を中学校、できれば南部の方に作っていただき、担当職員を配置していただければと思う。

(教育委員会 教育長)

これだけ不登校の子どもが増えてくると、不登校の子どもをどう見るかということで、一つは学校に行きづらさがあるので、魅力あ

る学校にしていくということである。

もう一つは見方を裏返すと、魅力ある学校づくりということは、今の学校はそういう子たちにとって魅力がない、学び方や活動が自分に合わないということである。今、言われている不登校特例校、学びの多様化学校のキャッチフレーズは、子どもが学校に合わせるのではなく、学校が子どもに合わせる学校。岐阜市の草潤中学校は学校らしくない学校をキャッチフレーズにしている。確かにコロナは子どもたちへのデメリットは大きかったが、対人関係が苦手な子たちにとっては距離を置く、物理的な距離を置くというのはある意味良かった部分もある。あるいは、羽島市では早い時期にタブレットを導入したことにより、一人ひとりの学びが成立し、深化したことなどでだいぶ救われた子たちもいる。そうやって考えていくと、学校が今どうあるべきか問われている。なぜこんなことを言うかという、今は学校に来られない子たちにスポットを当てているが、普段の授業や部活動では少し物足りないと思っている子どもたちも実は結構いる。今日のテーマである学びの多様化という意味では、学校に来られない子たちだけではなく、今来ている子たちにとっても学びの多様化はこれから求められていくのではないかと感じている。

3 ブロック (P20～24)

[説明]

教育委員会事務局が、「他自治体の不登校児童生徒の取組み」について説明

[意見交換]

(市長)

主に 22 ページ以降、今後の方向性について事務局から説明があった。既にこのカテゴリーについても意見を賜っているが、また意見があればお願いしたい。

(教育委員会 委員)

24 ページにある今後の方向性については、とても素晴らしいと感じた。コロナ禍でこうした活動ができなかったことが中学生の不登校増加の原因の一つだと思う。コロナ禍が明けたので、お楽しみ会やドッジボール大会などの活動をたくさん計画していただき、学校へ向かう楽しみを作っていただければと思う。

今後の方向性に、無理のない進級・進学とある。既に実施されて

いるとは思いますが、中学校の先生や管理職が小学校へ行き、中学校の様子や大事なポイントの話や授業を行うことで、子どもたちが中学へ入学したときに安心感を持って通える、スタートを切っていただけると良い。

また、中学入学後の子どもたちから、どうやって学習をしていけば良いのか聞かれることが多いので、中学 1 年生のうちに具体的な学習時間の目安など丁寧に指導していただくことが、学習が分からないから不登校になることを防ぐ一つになるのではないかと思います。

(教育委員会 委員)

今後の方向性について、色々な活動を通して、子どもたちが少しでも人との交流ができたらということで、大変素晴らしい活動だと思う。

修学旅行だけは参加するなど、色々な話を聞くことはあるが、学校も結局は一つの社会であり、そういうのを足がかりにしてだんだんと社会活動ができるようになって良いと思う。

(教育委員会 委員)

以前、市町村教育委員会連合会の分科会で、安心できる居場所づくりというテーマで話し合いをした際、発達障がいの子がある程度いるという話をされていた。そういう子たちだと特別支援学級に入っていないと、勉強が理解できないとか、周りの子とうまく関われないということがあり、学年が上がるほどにそれは顕著になってくると思う。勉強がついていけない中にも、努力してもどうしても分からないという場合があり、その子に合った勉強の仕方の教室に入れてあげることが不登校減少の要因になるのではないかと思います。

子どもたちが自主的に行うソーラン節や歌声集会の練習など、普通の授業ではないことに取り組める時間があると、本当に生き生きして楽しそうに学校へ登校している様子を見ているので、そういうことを先生たちもどんどん認めてあげて、子どもたちが自主的に頑張れる環境であってほしいと思う。

(教育委員会 委員)

不登校児童生徒への支援ということで、例えば心のアンケートや教育相談など、色々な選択肢があることは良いと思うが、社会的な自立という部分だけは留意して、どこで学んでも必ずそこだけはしっかり身につくことが必要である。

それから、新しい不登校児童生徒の増加を防ぐために魅力ある学校づくりと同時に、義務教育であるため、最低限これだけは身につけさせる学力やルール、集団の中でお互いに切磋琢磨するといった、ある程度自分が生きていく術を育てていくこと。また、目標をもって、苦しいことがあっても頑張れるような子どもの育成というのは外してはいけないと思う。

(教育委員会 教育長)

24 ページの中で、2 番目と 3 番目の方向性が大事だと思っている。人との関わりのあり方で、子どもと子ども、子どもと教員、子どもと地域という多様な人間関係。小学校での教科担任制など、教科によって先生が変わること。そして、目的や場所によって集団を変えるという、こうしたことが非常に大事で、冒頭に言ったように子どもたちの精神年齢が結構高くなっているので小学生も、多様な人間関係の中で切磋琢磨していくことが必要ではないかと思う。黙っていると人間は内向きになっていってしまうので、そういう意味では多様な人間関係が良いかなと思う。

もう一つ、こういった子どもたちとの最前線に当たっているのは教員であり、先生方も悩みながらやってみえる。黒木教頭先生が、教員の学びを支える心の専門家が重要だと言われたが、全く同感で、今の子どもたちについていけずに悩んでいる小学校の先生は年配の方に多い。今後、教育委員会も含めて、先生方の学びを支える心の専門家、臨床心理士やカウンセラー、あるいは特別支援のスペシャリストの方など色々な形で学校をサポートするような形を考えていく必要があるのではないかと感じた。

4 閉会

以上